

# 「自分の問題」と考えて

明通寺住職 中寫哲演さん (79)

添ってくれました。そして、地獄のような苦惱を語られてきました。そして短歌を詠まれたのです。

原発銀座  
に生きる

大飯原発（おおい町）から20キロ弱の小浜市の明通寺で住職をしています。半世紀にわたり、原発の稼働に反対してきました。

原点は、ある出会いでした。東京芸大を中退し、1963年に高野山大に編入しました。先輩に誘われ、和歌山県であった原水爆禁止の平和行進に参加したんです。参加はしましたが、当時の私はノンポリの学生。どこか上の空で、一人浮いていた。

そんなとき、広島で被爆した男性と知り合ったのです。男性は私に一日中付き



「死ぬる気で出征したる故郷へ隠れ病む身となりて帰りぬ」

「隠れ病む」の言葉に込められた思いに、播さぶられました。苦しみもそうですが、戦争、被爆、社会の負の部分の体現された思いに、「これではいけない」と。これが反核、反原発の原点の出会いです。

以来、被爆者支援のための托鉢など、自分ができるところを始めました。

原発との関わりもこの頃からです。美浜や敦賀では原発の建設が始まっていたのに、私は関心を持っていませんでした。

68年ごろ、小浜市で原発の誘致話が持ち上がりました。

新聞の切り抜きから始め、京大の若手の研究者と勉強会を開きました。発電という光がある一方、原爆と同じ大量の放射性物質が発生すると知りました。

国や電力会社は「必要で安全」と宣伝していました。が、では、なぜ若狭ばかり

に集中するのか。都市の電力消費のため、危険性をはらむ原発を田舎に押しつける構造に疑問を持ちました。市民団体をつくり、誘致反対の運動をしました。結局、小浜市民は建設を許しませんでした。

東京電力福島第一原発事故から10年になります。風化を感じます。美浜原発3号機も6月に再稼働しました。

かつて私も原発に関心はありませんでした。偉そうなことは言えませんが、何かをきっかけに、それぞれが自分の問題として考えてほしい。その思いを共有してもらおうにはどうすればいいのか、伝わるのか、悩みながら活動を続けています。

(佐藤常敏)

◇ 福島第一原発事故から10年の今年、福井では運転40年超の老朽原発が再稼働した。原発と向き合ってきた人たちに、思いを聞いた。随時掲載します。